

## 牧家所蔵加藤枝直関係資料の紹介

鈴木 淳

要 旨 本稿は、三重県松阪市の牧英三郎氏が所蔵される、加藤枝直関係の新出資料すなわち〔牧家系譜〕、枝直詠草および枝直、千蔭書簡等の翻印と解題である。なかでも〔牧家系譜〕は、加藤家の本家筋に当たり、松坂城番組同心を勤めた牧家に伝わる系譜として、従来、知られていた嫡系中心のそれを大きく塗り変える貴重な資料である。とくに、本系譜の出現によって、枝直祖父の遺言により、父尚之が北畠家旧臣仁木氏の末裔を妻に迎え、自らも誇り高き北畠家老臣加藤家を再興、別家したこと、さらに「人がましき奉公人」たらんとし、松坂の城番組同心の職を潔しとしなかった父の意向を汲んだ男子五人が、母方の縁を頼るなどして、すべて相模戸塚および江戸に活躍の場を求めたことなど、枝直の伝記の背景が明らかとなるのは意義深い。かくて兄弟の中で一人抜んで町奉行与力という栄職を手中にした枝直をもって、かつて関根正直が「立志伝中」の人と称したのも、また宜なるかなと言わなければならない。



本稿は、三重県松阪市大黒田町の牧英三郎氏所蔵の加藤枝直関係資料すなわち〔牧家系譜〕および枝直の詠草一点、同じく書簡一通と、千蔭の書簡二通、さらに参考のために加えた架蔵の千蔭書簡一通の翻印と解題である。翻印に際しての特記事項は、次の通りである。

- 一、〔牧家系譜〕について、その翻印の対象の下限を明治初期までとし、以下は省略した。
- 二、同じく、紙面の制約上、系譜の体裁を縦方式から横方式に改めた。
- 三、同じく、紙面の制約上、系譜全体を牧家の本系一つと牧家の母方および別家加藤家に関わる付系を六つに分けて掲出した。また本系、付系に重出の法名にはそれぞれ＊印を付し、付系においては法名のみを記して没年等の付帯記事は省略した。ただし原本自体に重出の一例は例外で、付帯記事も重記するままだに記した。その他、適宜、表記の体裁を改めて、理解の便に備えたところがある。
- 四、同じく、付箋、継紙等の形態に関するものなど、すべて校訂者による注記は（ ）に入れて示した。
- 五、同じく、見せ消ちについては、（ ）で原表記を示し、その下に訂正表記を示した。
- 六、同じく、朱墨の別については、一々これを断らなかつた。
- 七、詠草および書簡について、上段に写真を掲げ、下段にその釈文を示して上下対照の便を図り、とくに書簡は原態通りに改行した。
- 八、資料解説の便に備え、私に読点を打ち、また返り点を施した。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

〔牧家系譜〕

翻 印

(一)〔牧家系譜〕

〈本系〉

○系譜之内略書（以下、後補綴紙）拔但景光前之系略之

加藤彈正、本姓橘

景 光

自「曆応元戊寅年」伊勢国司北畠家之老職而、住「同国飯高郡伊勢寺城」領「十八邑」  
〔付箋〕「加藤家名乗景光ノ二字ヲ用ル由」

此間、加藤左馬佐清宗迄之系略<sub>ス</sub>

自「景光」至「清宗」属「国司家」既六代也、加藤二派東加藤家之紋藤丸也、伊勢加藤<sup>○家</sup>之紋、中略<sub>ス</sub>、天文比五年三度之火災<sup>ニ</sup>家旧記殆焼失、然共景光自筆之記録家伝之軍書<sup>并</sup>別録一卷、今猶所秘藏也、考<sub>レ</sub>之而草<sub>二</sub>系譜<sub>一</sub>、略書以伝<sub>二</sub>子孫<sub>一</sub>云

天文廿二<sup>癸丑</sup>年

十一月十五日

正清一子

左馬佐清宗記之

加藤孫左衛門、天正六<sup>戊寅</sup>年卒、伊勢寺村、同邑葬、滝泉寺

景之

自景光至景之七代仕、国司家、天正四丙子年十一月廿五日、前国司北畠入道不知斎<sup>具教</sup>為織田信長被弑、新国司左中将信意公者滝河一益預之、当年北畠家滅亡矣、自是後景之蟄居伊勢寺而不属織田家、然而信長公感其忠貞、且永禄十二年於大河内城父子防戰之功拔群之故不深罪<sup>云</sup>、旧之土民等扶助之而

住伊勢寺<sup>伊勢寺ハ村之名也</sup>

<sup>(以下、後補雜紙)</sup>

天正六戊寅年卒、伊勢寺村、滝泉寺葬

加藤孫左衛門景之

<sup>(以下、本紙)</sup>

慶長十八<sup>丑寅</sup>三月五日、墓伊勢寺村滝泉寺二有、大法院、俗名加藤孫九郎、三十九才卒

二覺譽道円居士

寛文六丙午四月十五日、駅部田村光明寺二墓アリ、知覺院

法譽妙祐大姉

寛文九己酉三月四日、墓松坂樹敬寺ニ有、俗名牧孫右衛門重治、シゲハル 転光院

宝誉浄輪居士

〔付箋〕「小笠原与左衛門家老牧久右衛門と申者方江養子ニ参り候処、其後不縁ニ相成候処、若山々長野九

左衛門殿松坂江初而御越被成、松坂御城番六人之者被召抱、夫々牧孫右衛門と申候由也、法誉」

元禄八乙亥六月二日、墓同、転相院

二宝誉妙輪大姉

万治三<sub>庚子</sub>八月十三日

三香林禅定門

元禄元<sub>戊辰</sub>十一月十六日、九州肥後ノ国ニテ果ル

四松山知慶信女

慶安元<sub>戊子</sub>五月十三日、墓樹敬寺ニ有

\*一休安禅定門

貞享五戊辰正月三日、墓一志郡小倭浄願寺ニアリ、海野新兵衛妻

十長庵妙寿大姉

寛保三癸亥九月十四日、墓樹敬寺ニアリ、俗名加藤九郎兵衛

九〔加藤九郎兵衛〕広誉源海信士

享保二十年乙卯正月十三日、墓津領下多氣村西光院ニ有、世古惣兵衛也、後二陌英斬ト云

八〔世古陌英斬〕本性清寛信士

享保六<sup>辛</sup>正月朔日、墓江津西方寺ニアリ、高橋与兵衛妻

七法億智心信尼

享保十乙巳十一月廿九日、墓樹敬寺ニアリ

六蓮誉宅岸比丘尼

享保十乙巳三月六日、墓江津村西方寺ニアリ、今西甚七妻

五真敬妙心信女

享保九甲辰九月十日、墓樹敬寺ニアリ、俗名加藤与右衛門尚之、家別ニ立加藤ニナル、入道名加藤春雪也、御組

ニテ親遺言ニ而加藤ニナル、清淨院

\*四津竜水雲大徳

〔付巻〕「加藤与右衛門尚之、親牧孫右衛門殿遺言ニ而東奉行組相勤、名字加藤ト成ル、当時江戸加藤又左衛門

町与力役相勤、相続申候」

元禄十一戊寅三月廿一日、墓右二同

二仰誉妙誓信尼

宝永四丁亥三月九日、墓津領下多気村西光院ニアリ、世古惣兵衛妻

一真如元空大姉

宝永七庚寅閏八月十二日、墓樹敬寺ニアリ、俗名牧孫右衛門政利

三棲誉淨閑大徳



享保八癸卯十月廿三日、墓同

\*一棲譽貞閑比丘尼

天和二壬戌十月十七日、墓樹敬寺ニアリ

十一知還童子

宝曆五乙亥七月廿四日、墓右同

十載譽貞運大姉

享保十六辛亥二月三日、墓同、俗名牧小右衛門政致也、田丸領新桑竈西川氏ヨリ牧孫右衛門養子ニ来ル、右貞運

ト夫姪ナリ、家別ニ立ツ、御組ニ而

九載譽了運居士

延宝六戊午十一月朔日、墓同

八冬幼童子

寛保二壬戌二月廿日、墓松坂清光寺ニ有、俗名於花

七〔村林吉右衛門妻〕触身光栄信女

寛文十三丑九月十六日、墓樹敬寺ニアリ

六幼露童子

宝曆三癸酉十月十八日、江戸ニテ果

五〔牧安左衛門〕蓮譽浄利居士

〔付箋〕「枝直從弟町与力中村三左衛門ハ此末ニモ可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之哉」

延享五戊辰二月十五日、墓松坂常念寺ニ有、八十才ニテ終、俗名於嶋

四〔杉村和泉母〕玉譽貞琳信女

延享二乙丑十二月廿日、俗名於菊

三〔河合清五郎妻〕久巖妙昌法尼

延享二乙丑九月十三日、墓田丸西光寺ニ有

二〔大得寺〕流蓮社響譽上人真曲碩音大和尚

享保十乙巳六月廿五日、墓樹敬寺ニアリ、俗名牧忠右衛門政衍

一信譽元童居士

宝曆三癸酉二月七日、墓右同、俗名於ヨシ

\*二〔信譽理空大姉〕信譽元室理空大姉

（以下、後補綴紙<sub>3</sub>）

宝曆十一巳四月廿三日、松坂御城代組黒川喜大夫妻、同所法久寺墓

七修法院妙実日祐信女

享保三戊三月五日、墓樹敬寺墓

六夢幻童子

安永五申六月七日、京都ニ而果、寺ハ同所ニ条通り来光寺、俗名牧弥右衛門

五大通宗悦信士

明和二酉十月廿九日、津領下多気村加藤閑助、同村西光院ニ墓

四 円岳融保信士

宝永二乙酉九月十三日、樹敬寺墓

三 光岳了照童子

元禄十三辰六月廿四日、墓同

一 洞玄童子

宝暦五乙亥六月廿日、樹敬寺墓、牧忠右衛門浄繁

三 元誉信覚浄空居士

寛政六壬寅十一月廿五日、上多気村又次郎娘

鏡誉円室妙空大姉

宝暦四甲戌三月九日、樹敬寺墓、養女ニナリテ十七才ニ而卒、加藤閑助娘

\* 二 春光知晴信女

天明七未九月廿五日、樹敬寺墓、加藤閑助娘

\* 三 紫雲院円誉光月大姉

寛政三亥七月廿四日、墓同、出生山家同心白井丈右衛門家清由、牧忠右衛門名乗

\* 二 無量院晦誉清由居士

寛政九巳十一月廿四日、樹敬寺墓

二 超刹妙林大姉

天保元寅十二月二日、樹敬寺墓、七十三才二而卒

一 喚向院応誉貞声大姉

文政三辰七月二日、墓同、六十才二而卒、牧忠右衛門

\* 一称名院響誉浄音居士

寛政八辰四月廿二日、樹敬寺墓

三 快運童子

文化十酉七月廿二日、養泉寺墓、御城代組林平馬妻

一 梅雲妙実大姉

文政十二丑八月廿七日、三十八才、政治良

郷音院正誉大震居士

明治十二年九月十七日、八十才、樹敬寺墓

\* 瑞光院震誉圭玉大姉

天保十三寅十月廿八日、二才二而卒、樹敬寺墓

明治十一年寅二月十七日、八十二才、樹敬寺墓  
法説院演替生宜居士

〈付系一〉

寛文二壬寅九月十六日、墓樹敬寺二有  
（本姓）

心譽光悦信士

延宝四丙辰九月廿六日、墓同

心譽妙寿信女

\* 休安禪定門

元禄十一戊寅六月十九日、墓同

二貞譽樹林信女

延宝九辛酉六月廿四日、松坂樹敬寺塔頭何似院先住、墓同所

一心蓮社善譽受頓大徳

貞享二乙丑九月廿五日、墓同

三正譽直念信士

\* 一棲譽貞閑比丘尼

延宝四丙辰二月十日、樹敬寺塔頭何似院先住、墓同

二三蓮社宝誉天随大徳

〈付系二〉

寛永廿未十一月九日、墓田村光明寺ニ有

〔本姓〕

月向道雪信士

元禄五申九月十四日、墓同

純正利貞信女

元禄七戌四月廿五日、墓田村光明寺ニ有

観月道念信士

万治二亥八月十五日、墓同

桂月妙安信女

享保九甲辰九月十日、俗名加藤与右衛門尚之也、御組ニ而勤ル、同丈右衛門墓ニ石塔有、墓附相渡ス、清浄院

\* 津竜水雲大徳

宝永五戊子四月五日、墓樹敬寺ニアリ、法性院

泉流妙月大姉

正徳三巳ノ二月廿三日、墓田村光明寺ニアリ、本家也、俗名七栗武右衛門  
ニ選月道入信士

\*二〔信譽理空大姉〕信譽元室理空大姉

宝曆三<sup>癸酉</sup>七月廿九日、神領山田ニテ果、俗名於マキ、西河原町宇佐美兵左衛門

一〔宇佐美兵左衛門妻〕本光智清信女

正徳四年九月八日、相州戸塚ニ而果、俗名加藤孫兵衛

三億譽西心禪定門

宝曆六年子十一月五日、戸塚ニ而果、俗名加藤中和

四〔加藤中和〕穩譽了安禪定門

宝曆十庚辰十一月廿六日、江戸ニテ果、俗名倉光十郎左衛門

五〔倉光十郎左衛門〕青黄院紅譽蓮然依木居士

明和八卯九月廿九日、江戸ニテ果、俗名加藤与左衛門、墓浅草称往院塔中道光菴ニ有

六〔加藤六郎兵衛〕不遷院善譽在止居士

〔付箋〕「御徒相勤当時家無<sub>レ</sub>之、寺ハ加藤ニテ引請」

天明五巳八月十日、江戸ニテ卒、俗名加藤又左衛門枝直、九十歳、江戸本所回向院工葬

七〔加藤又左衛門〕柔性院輓譽東水居士

〔付箋〕「享保五<sup>庚子</sup>年九月、江戸町奉行大岡越前守組与力従弟中村三左衛門病死、跡悴又蔵幼年ニ付番代ニ罷

出与力相勤、同十六年<sup>辛</sup>亥十月番代 御免之上、同十一月稲生下野守組与力<sup>江</sup>新規被<sup>召</sup>抱、其後為直ヲ枝直に改

(付箋)「加藤又左衛門佐芳<sup>後改千蔭</sup> 父枝直跡町与力相続、文化五年<sup>辰</sup>九月二日卒、行年七十四歳、浜成院弁譽慈航居士、墓同

加藤又左衛門直蔭 父千蔭跡町与力相続、文化十年<sup>酉</sup>五月九日卒、行年四十四歳、求淨院生譽刹応居士、墓同

加藤又左衛門千季<sup>当主</sup> 父直蔭跡町与力相続

加藤橘三郎直道<sup>実子惣領</sup> 自<sup>部屋住</sup> 町与力相勤

觀月道念信士

享保二申正月廿三日、墓同

円岳了頓信女

享保十五戌三月十三日、相州戸塚、俗名中出与右衛門

三遍生院明譽光円居士

(付箋)「鈴木親類二而中出檢校与云者有、古人也」

四七栗三左衛門

元禄十三庚辰十二月九日、田村笠井重郎兵衛先妻、墓田村光明寺二有



五 如空妙吟信女

享保十七壬子十月十七日、油屋町中出次郎兵衛安明、墓松坂清光寺二有

六 「中出次郎兵衛」円誉了輝居士

（付箋）「元祖松坂油屋町出ニテ中出次郎兵衛と申人ニ而、地主之由、鈴木源七殿被<sub>レ</sub>申候、尤伊勢屋源七ノ事」

七 一木八右衛門妻

八 鈴木兒亮

（付箋）「戸塚鈴木歟、当時伊勢屋源七ト云、宿中之大家也」

〈付系三〉

津領下多氣村加藤閑助、明和二酉十月廿九日、墓同  
（継紙<sub>3</sub>）

円岳融保信士

安永三年十二月十二日、墓同村西光院

慶法彰延信女

\*二 春光知晴信女

\*三 紫雲院円誉光大姉

〈付系四〉

〔同七〕  
一志郡一色村山家同心、白井市郎兵衛

＊二無量院晦誓清由居士

天明四甲辰八月十二日、一志郡一色村山家同心、白井丈右衛門

一本誓院釈心月西願居士

〔付系五〕

相可村地主平兵衛

〔同七〕

松坂領黒田新田二住居ス、寛政二 十二月廿二日、大黒田村常宝寺墓、同村地主中頭氏出生ニ而遁家、同村新田

二住居ス、地主江養子

絶光道寿居士

寛政十一 八月二日、墓同、代女、地主平兵衛娘、右同居<sub>ス</sub>

成光妙因大姉

＊一称名院響誓浄音居士

寛政二戌十月廿三日、大平生村江戸屋伊兵衛、墓当町願証寺

二釈明孝順教信士

〈付系六〉

一志郡神津前村西性寺墓、文化十酉五月廿八日、一志郡一色村地土臼井善九郎

発心院釈積徳善慶居士

嘉永二酉十一月廿八日、墓同、出出久居領三ヶ野村無足人辻岡十三郎、八十四才

聞法院釈善遊貞慶大姉

\*瑞光院震譽圭玉大姉

天保十四 七月十三日、一志郡一色村地土臼井善左衛門、西性寺墓、浜田八郎兵衛

心了院釈諦聴高義居士

覚譽貞月法尼

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

為直上

古郷のあね君の御もとより、門のまへにむかし見な  
れし野の宮といふ桜ことしもかはらぬ色に咲たれは  
よめるとて、ふる郷の老木のさくらとし経てもかは  
らぬ色を君にみせはや、ときこえさせ給ふければよ  
みてまいらせける

立かへりやかてこそみめ桜花君か千とせともろ共に  
まで

ついてにちかき比よみ候うたおもひいたし候にまか  
せかき付参らせ候

静見花

くれかたき春の一日を千とせともむへは花に物わすれ  
して

谷花

されはこそ何とは有けれ咲花の色香も深き谷の下道  
馬上見花

来てそみるちらぬ梢も散花の雪に道しる駒にまかせて

樹陰夏来

あかさりし都の錦おりかへて又たちなれん木々の下陰

故郷橘

忘れえぬ昔の夢のあと、へはしのふも薫る軒の橘

竹亭夏月

明やすき夜やうきふしの程ならん竹の葉分のまとの月影

江上螢飛

あらはれて螢とふ江の水か、みけたぬおもひの影やはつらん

晚風如秋

夕月の真砂の霜を吹風にみそきもまたて夏や暮けん

述 懷

何事につけてうらみん事たらぬ身もやす国のをしへ有世を

已上九首

八十八歳の はかりなき齢にみれば算へこし  
はるよめる 八十ち八とせの今そみとり子 枝直

先月十五日之御状相届申候、

先以御家内弥御無難之御事

珍重之至ニ御座候、同苗又左衛門家内

相揃無<sub>レ</sub>恙罷在候、老齡儀幸

八十八歳ニ成候而詠候小短籍五枚

進候ニ付、被<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>御念<sub>レ</sub>候御紙面之

趣ニ御座候、然者手織之由ニ而、

見事成縮木綿一端被<sub>レ</sub>贈

遣、家内打寄候而、うつくしき

地相にて候と、称意申候、夏中

着用可<sub>レ</sub>申と不<sub>レ</sub>浅忝存候、且又

老夫婦御祝候而、俳諧発句

御書付被<sub>レ</sub>遣忝存候、里交と申者

御自分俳名にて御座候半と奉<sub>レ</sub>存候、

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

おもしろき発句にて御座候、猶期  
後信一候、恐惶謹言

加藤枝直

橘（花押）

三月十五日

牧忠右衛門殿

御坐下

新春之御慶賀至可

有「際限」申納候、弥

御家内御儀御安全被<sub>レ</sub>成

御越年「目出度奉<sub>レ</sub>」存候、

私儀無事ニ臨賀候、

貴意安思召可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候、

旧冬者老父大病ニ

御座候処、当時快復

致し候、大かた常躰ニ相成

申候、旧臘ハ御尋被<sub>レ</sub>下忝

奉<sub>レ</sub>存候処、御報も不

申、背「本意」申候、御家内

皆様宜御祝詞被<sub>レ</sub>

仰達「可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>」下候、家族

同意ニ申候、未春寒

甚御座候条、折角

御堅勝御凌可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.



猶期「永日」候、恐惶謹言

加藤又左衛門

（「字花押」）

千蔭

正月十一日

牧忠右衛門様

人々御中

猶以折角余寒凌可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候

様奉<sub>レ</sub>存候、以上

青陽之御慶賀全期

可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>御座<sub>二</sub>日出度申納度、

御家内御揃御堅固ニ

御越年被<sub>レ</sub>成候御事、珍重

奉<sub>レ</sub>存候、当表相揃無事

致<sub>二</sub>加年<sub>一</sub>候、御心易可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>思召<sub>一</sub>候、

当春者早く春めき可

<sub>レ</sub>申様子ニ御座候而大慶

仕候、旧臘も不<sub>二</sub>相替<sub>一</sub>御用

多キ相勤、御褒美銀

十枚頂戴仕、難<sub>レ</sub>有奉<sub>レ</sub>存候、

乍<sub>レ</sub>序御吹聴申候、御家内様

へ宜奉<sub>レ</sub>頼候、家内同然ニ

御祝詞申候、猶期<sub>二</sub>永日之時<sub>一</sub>候

恐惶謹言

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

加藤又左衛門

（二  
字花押）  
千蔭

正月二日

牧忠右衛門様

人々御中

貴札致<sub>レ</sub>拜見<sub>レ</sub>候、寒冷

御座候得共、弥御揃被<sub>レ</sub>成

御堅固之御事珍重

奉<sub>レ</sub>存候、然者泰次郎

私方へ引取候二付、御祝

被<sub>レ</sub>仰下<sub>レ</sub>殊木綿一反

懇祝意遠路被<sub>レ</sub>思召

附、忝幾久敷祝納仕候、

御家内様方へ宜奉<sub>レ</sub>頼候、

家内同意ニ御礼申候、

猶期<sub>レ</sub>後音之時<sub>レ</sub>候、恐惶

謹言

加藤又左衛門

(二字花押)  
千蔭

九月廿四日

牧忠右衛門様

御報

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

## 解題

### 一、〔牧家系譜〕

加藤枝直の伝記には、筑波大学図書館蔵の加藤直種著『加藤枝直翁略伝』あるいは関根正直「立志伝中の橘枝直」<sup>①</sup>があり、また系譜としては、三村竹清の「近世文雅伝」<sup>②</sup>に所掲のものほか、御子孫の加藤家にも伝えられ、それらによつて枝直の家系の概略を知ることができる。しかし、右はいずれも大概、加藤家の嫡系を辿つたもので、伯叔兄弟など家系の詳細を知ろうとする者にとつては、いささか意に満たないものがあつた。とくに関根正直が枝直をもつて「立志伝中」の人と称した背景については、従前、隔靴搔痒の感を免れえなかつたと言える。しかるに今回、紹介する松阪市牧家所蔵資料（「牧家系譜」）によれば、枝直の祖父牧重治の遺言によつて、その次男で枝直父の尚之が、紀伊家倍臣の牧氏からその昔、北畠家老臣を勤めた加藤氏に復姓し、妻にやはり北畠家の多氣御所に仕えた仁木氏の後裔を迎えて別家を立てたことがわかる。さらにまた本家牧氏のもと松坂城番組同心として勤務することを潔しとしない尚之の意向を受けて、枝直の兄弟がすべて母方の縁を頼るなどして、相模国戸塚や江戸に活躍の場を求め、わけでも末男の枝直が勇躍、町奉行与力にまで上りつめ、もつて祖父以来の素懷を遂げた経緯が明らかとなり、まさにこれまでの雲霧が一掃される思いがした。かつ本家の御子孫である牧家に現存する枝直、千蔭の遺墨により、両家が後々まで懇ろな親戚としての交際を怠らず、おたがい和歌、俳諧等に遊んで清閑を事としていた様子が窺えるのである。枝直の栄達を我事のように歓迎した、牧家の度量の大きさを思うべきであらう。

さて、本系譜は全紙約二百糎、横約二十九糎で、計五枚の継紙および書き直しの一紙からなる。ただし上下各二枚

は、時を逐うて後補したもので、今その記載、貼り継ぎの順を推定してイロハで示せば、次のようである。また付箋

後補継紙 1	同 2	本紙	後補継紙 3	同 4
〈ハ〉	〈ロ〉	〈イ〉	〈ニ〉	〈ホ〉

が大小合わせて計十七枚ほどあるほか、本紙に細書の加筆書き入れが数多く認められる。

筆蹟は数種類認められるが、継紙と付箋を合わせて大雑把に言えば、本紙を第一として、上部の後補継紙2および本紙の書入れが第二、同じく後補継紙1および付箋の大半が第三、さらに下部の後補継紙3が第四、同じく後補継紙4が第五、その他の付箋となろう。記載の時期について、まず本紙は、その記載範囲からすると、天明五年没の枝直を下限とすることになるが、没時等の付帯記事を含めて後補の筆が混入しており、本紙も実際には、天明五年よりかなり早い時期に一旦書き置かれたものが加筆訂正され、徐々に整えられていったものと考えられる。とりわけ注意すべきは、享保年間のある時期以降に物故した人々の名号表記が、当初は俗名で朱記されていたながら、のちに戒名に改められていることである。より具体的に言うると、はじめから戒名表記で書き改めのない記載の下限が「享保十六辛亥二月三日」の没時で、逆に俗名から戒名へ書き改められた記載の上限が「享保十七壬子十月十七日」の没時であるから、執筆時はその間の二年足らずに求められ、おそらく筆者は、当時の牧家の当主忠右衛門浄繁であろう。そして浄繁をして執筆せしめた要因として、浄繁父の政衍の従兄弟の枝直が、まさに享保十六年十一月に稲生下野守正武配下の北町奉行五番組与力に取り立てられるという一件が起き、その前後、縁者に江戸や相模国戸塚に徙居して活躍する人々が輩出したことが挙げられよう。換言すれば、本系譜は、一族の誉れとして、枝直が立身出世を遂げたことを機に、本家牧家と別家加藤家との縁戚関係を明示し、長く記憶しておくことを目的に書かれたと可能性が大いにあると

いうことである。

筆蹟の第二の執筆時期は不明であるが、筆蹟第三すなわち後補継紙1および大半の付箋の執筆時期については、枝直から線を引いて千蔭、直蔭、千季、直道と続く系譜を記した付箋の記載のうち、千季について「当主」とあることから、父直蔭の没時、文化十年五月九日から千季の没時である文久三年までの間ということになる。また、筆蹟第四は、実際には両筆あり、天保十四年七月十三日を最終没時とする筆に、明治十二年九月十七日を最終とする別の一筆が加上されている。さらに筆蹟第五は、昭和五十三年八月十三日の最終没時の記載を有するので、その年時を遡ることはない。

本系譜の体裁は、各人につきまず戒名あるいは俗名を本記し、右傍に没年月日、墓所、俗名その他を細書で注記し、親子、夫婦、兄弟姉妹を縦横の線で繋いだもので、過去帳や位牌に基づいて仕立てるといふ、系譜作成の一般に拠つたものを基本にしたと思われる。ただし、本紙のうち享保十七年以降の生存者については、当初、俗名をもつて記し、没後、戒名に書き改められたこと、前述の通りである。また、とくに付箋の記載は千季辺りから得た見聞を基礎にしたものであろうか。さらに、後補継紙1の遠祖加藤景光、景之についての記載は、はじめに「系譜之内略書抜」とある通り、別に存した詳細な伝書から抜粋したものである。

さて、本系譜の特色のひとつは、牧家を本系とする点に求められよう。そもそも牧家およびその別家の加藤家が遠祖として仰ぐ加藤弾正景光は、本系譜にある通り、伊勢国司北畠家の老臣として、同国伊勢寺十八村を領有していた。その後も、代々北畠家に仕えており、北畠顕能公六百年祭奉賛会編『伊勢国司とその時代』に付載の「伊勢国司諸侍役付（北畠氏家臣録）」（天正十年六月五日記）に、

△加藤方

藤氏当国飯高郡伊勢寺之住老中 加藤民部少輔

公事奉行

同 左馬之助

子孫田丸有之 同 甚五郎

同 彦七郎

<sup>(3)</sup>とあるうちの、左馬之助すなわち景光六代の孫左馬佐清宗のことであろう。

また清宗の次の景之について、本家譜によれば、天正四年十一月、北畠具教が織田信長によつて弑殺されて同家が滅亡した後、伊勢寺村に蟄居させられたが、志操を守つて織田家に属さなかつたため、信長はその忠貞および永禄十年の大河内城における戦功を感賞して、深く罰することがなかつたと言う。しかして景之の孫孫右衛門重治、法名淨輪は、付箋に記すごとく、紀伊徳川家の重臣小笠原与左衛門の家老牧久右衛門方の養子となり、不縁後、浪人の身となつても牧氏を名乗つていたが、のち和歌山より代官長野九左衛門が赴任して来た際、御城番六人衆の一人として召し抱えられたと言う。同様のことは、牧家所蔵の親類書にも、

先祖孫右衛門儀、松坂領伊勢寺村二浪人仕候由、夫より以前之儀耽と相知不<sub>レ</sub>申候、元和五末年勢州三領御仕置代官二長野九左衛門殿御越被<sub>レ</sub>成、右御勤之内寛永十三子年御城番二被<sub>レ</sub>召抱、寛文九酉年二十四年相勤病死仕候、尤右勤之内十二年小頭役相勤申候

<sup>(4)</sup>とあるごとくである。また長野九左衛門に抱えられたより詳しい経緯についても、同資料に、

一、松坂御城先城主古田兵部小輔殿、江戸大御普請御越候節、腫物御煩御死去之由、御子息きたい殿御幼少故、兵部殿御舍弟、古田大膳を後見二被<sub>レ</sub>仰付、未年御上洛之刻、大膳殿御参勤、同年夏伏見<sub>ニ</sub>直二石州浜田<sub>江</sub>御国替二而御越候由、大膳殿家老古田助左衛門松坂二而大藪新右衛門殿、井村善九郎殿、笠原助左衛門殿<sub>江</sub>出合、御城



Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

〔牧家親類書〕

其外侍屋敷諸色相渡申候由、新右衛門殿  
御組同心八九人不足二付、御抱被<sub>レ</sub>成候、  
其節御城番六人之内浪人二而罷在候者も  
御座候得共、同心二者不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>出候、然候  
処、同年暮長野九左衛門殿御越、六人之  
者御城番二被<sub>レ</sub>召抱候、御切米ハ三石式  
人扶持二而、侍屋敷分手作分被<sub>レ</sub>下、御  
城廻り藪山落葉下草等申請罷在候

云々とある。すなわち松坂城主として、蒲生  
飛騨守氏郷、服部采女正一忠の跡を承けた古  
田兵部少輔重勝が江戸で病死したのち、幼少  
の嫡子希代丸のために重勝弟の古田大膳大夫  
重治が後見役となるが、元和元年上洛して後、  
伏見より直ちに石見国浜田へ国替となった。  
またのち元和五年に紀伊家の領城となったの  
で、大膳大夫重治の家老古田助左衛門が松坂  
で紀伊家の大藪、井村、笠原の三氏と出会し、  
城その他を請け渡したと言う。その節、大藪

氏は不足の組同心八九人を新たに召抱えたが、牧氏らは召されなかったところ、同年暮に代官長野九左衛門が赴任し、牧氏ほか六人を城番組として召抱え、城廻りの整理、掃除等の任務に就かせたというものである。

この城番六人衆とは、宝暦二年に久世兼由が著した『松坂権輿雜集』卷二殿町部の「御城番同心之事」に、

一、元和五末年、為御城番同心牧孫右衛門、多賀左助、亀井太左衛門、貝發喜太夫、水田茂助、水本庄藏右六人、長野九左衛門於松坂被抱、御曲輪二家屋敷相渡ル、其地御殿所二可成之由而被召上、寛文六年同心町江家屋敷相渡ル、右之内水田ハ小泉二代リ、亀井ハ実父本苗小林二改、右小林が実父甚内と言者黒田村の小林二住シ、古田大膳太夫大坂御出陣の供ニ被召連、依働給地之状左二集

<sup>(5)</sup>とあるがごとき面々であり、また同書の「両役古組之事」にも、次のようにある。<sup>(6)</sup>

一、明暦三<sup>丁</sup>年<sup>西</sup>両役所<sup>江</sup>組拾四人被<sup>レ</sup>為<sup>二</sup>附置<sup>一</sup>、小笠原次右衛門某於松坂被抱、同心町江家屋相渡ル、御城番六人ものと都合式拾人、小頭兩人、最初小頭多賀左助法名常青、二代小頭多賀左介舩左五兵衛害<sup>レ</sup>人御領被<sup>レ</sup>放、三代小頭貝發喜太夫法名清心

又初代小頭牧孫右衛門法名淨輪、二代小頭牧孫右衛門法名淨閑、三代小頭牧忠右衛門法名元童、自是耆人二成、四代小頭中西猶右衛門、五代牧忠右衛門

すなわち明暦三年、松坂奉行（両役衆）が設置されるや、赴任した小笠原次左衛門に六人衆のほか新たに十四人が付置され、それと共に小頭兩名が任命され、牧家は孫右衛門重治（淨輪）、同政利（淨閑）、忠右衛門政衍（元童）の三代に亘ってその任に就き、その後、小頭が一人制となつてからも一期置いて忠右衛門淨繁が勤めたのである。

さて、本系譜のいまひとつの特色は、言うまでもなく枝直を中心とする加藤家の系譜の記載に求められよう。その遠祖は牧家と同じく北畠家老臣の加藤弾正景光であり、その七代の孫景之の孫が牧家の養子に入り、孫右衛門重治を

名乗ったことは既述のごとくである。しかしてその次男（第四子）は、附箋に「親牧孫右衛門殿遺言ニ而東奉行組相勤、名字加藤ト成ル」とあるように、父重治の遺言に従って加藤に復姓し、別家を立てたと言う。これすなわち枝直の父加藤与右衛門尚之、号春雪であり、重治は寛文九年に没しているから、復姓は寛文年間のことか。松坂は、北畠旧臣の名家も多く遺存して、しかく北畠の遺臣であることを誇りとする土地柄である。かの本居宣長が木綿間屋小津姓から本居へ復姓したのも、北畠および蒲生の遺臣としての矜持のなせるわざで、尚之の例と揆を一にするものであった。

尚之は本系譜に「御組ニ而勤ル」とあるように、本家兄の政利のもとで城番組同心を勤めたが、その子供には枝直を含めて次の二女五男がいた。

長女 宇佐美兵右衛門妻 本光智清信女

次女 牧忠右衛門政衍妻 信誉元室理空大姉

長男 加藤孫兵衛景澄 憶誉西心禪定門

次男 加藤中和遠定 穩誉了安禪定門

三男 倉光十郎左衛門（はじめ源蔵）義方 青黄院紅誉蓮然依木居士

四男 加藤与左衛門（はじめ六郎兵衛）重昌 不遷院善誉在止居士

五男 加藤又左衛門（はじめ弥七郎）枝直 柔性院輦誉東水居士

このうち、三男義方と五男枝直については、『松坂権輿雜集』の「両役古組之事」の先掲部分に続けて、

右組之内、山住弥十郎法名方慶、田丸御鳥見ニ進、同組加藤源蔵、宝永六丑年右組を退き、正徳三巳年安部撰津守某家の用人倉光勘解由養子と成、享保六丑年家督相続、当時倉光十郎左衛門と改、弟加藤弥七郎、享保五子年

大岡越前守某組与力中村三左衛門死後跡目相続、享保十六亥年十一月右三左衛門実子又蔵二家督を譲り、其身は  
稻生下野守某組与力と成ル、新地式百石拝領

とある。すなわち義方は城番組を退いたのち、幕臣安部撰津守信賢の用人倉光勘解由の養子となったため、枝直が尚  
之の跡を継ぐ恰好となったこと、本系譜の付箋に「当時江戸加藤又左衛門町与力役相勤相続申候也」とあるごとくで  
ある。又、枝直が跡目を継ぐことになった中村三左衛門について、本系譜では、本家牧政衍の弟蓮誉浄利居士（牧安  
左衛門）に付された箋に「枝直従弟町与力中村三左衛門ハ此末ニモ可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之哉」とあるのは誤りで、これは母方の叔  
父七栗三左衛門のことではなからうか。加藤直種の『加藤枝直翁略伝』にも「父は尚之、母は中村三左衛門の養父中  
村九左衛門の妹也」とあり、疑問もあるが、中村三左衛門が母方の系累であることは間違ひなさそうである。

かくて枝直は享保五年、大岡越前守忠相の組与力に召抱えられ、積年の素願を遂げたのであるが、関根正直が引く、  
その年、故郷の父尚之に送った信書には、直参に召出され、地方知行を拝領した喜びを報じたのち、次のように  
ある。<sup>8)</sup>

此上の心にかゝり候事は、尊体様（父春雪をさす）へしかゞくの御用にも相立不<sup>レ</sup>申、忠右衛門（牧氏、翁の姉  
婿）一人の御介抱に御成被<sup>レ</sup>成候事、口惜しき事に奉<sup>レ</sup>存候得共、兼々尊体様御意を請候は、とかく人がましき奉  
公人と罷成、先祖の面目をすゝぎ、賤しき奉公の名を出し不<sup>レ</sup>申候様にと、夫のみ仰付られ候故、御見繼<sup>サミツギ</sup>の事は、  
六郎兵衛（母方の親戚）へ頼置、何卒御一生の内に、地方取<sup>チカラトリ</sup>と成候事を、御耳に入れ申度大願に奉<sup>レ</sup>存候

右は、父尚之の達而の望みでもあった、家名を立て先祖の面目を雪ぐ一念のために、営々と努力して来た結果、つい  
に地方取の直参という榮譽を手に入れた一方、父親の世話を蔑ろにしてきたことを詫びたものである。尚之こと春雪  
は、枝直の歌集『東歌』の千蔭の序に、「ち、の実の父の翁、神風いせの国にあれ出でて、おほち翁歌をしも好みよ

まれしによりて、いと若かりし程より歌になむ心をよせられける」とある通り、和歌を嗜んだため、枝直も歌の道に入ったと言う。右の枝直書簡の文中、「忠右衛門」とあるのは従兄政衍のことで、枝直の姉がヨシが嫁いでいることもあって、父尚之はもっぱらこの夫婦の世話になっていたとくである。また、同じく文中に「六郎兵衛」とあるのは、関根氏の「母方の親戚」という注は誤りで、枝直の兄と左衛門重昌の初称である。当初、枝直はこの重昌に父親の見継ぎのことを頼みながら、それがならなかった趣であるのは、そのころ、重昌がすでに江戸へ出て徒組を勤めていたからであろうか。ちなみにのちに千蔭が養子に迎えた直蔭は重昌の孫にはかならない。

さて、枝直の兄弟のうち長男の景澄、次男の遠定については、石井光太郎氏の『戸塚区史』の「文人の活躍」にも紹介されているが、横浜市戸塚区上倉田町の浄土宗沢泉山蔵田寺の山門右手奥にある歴代住職等の墓域近くに石塔が存し、それぞれ次のように刻まれている。

加藤景澄

（正面） 帰真億誓西心禪定門靈位

（左側） 正徳四年<sup>甲午</sup>九月八日

（右側） 行年三十四歳

（背面） 加藤孫兵衛景澄之墓

加藤遠定

（正面） 帰真穩誓了安禪定門靈位

（左側） 宝暦六<sup>丙子</sup>年十一月五日

（右側） 行年七十三歳

(背面) 加藤中和遠定之墓

石塔は後建とおぼしく、また後裔についても不詳である。直種の『加藤枝直翁略伝』には、「長兄孫兵衛景澄故ありて遠く相模の国戸塚に移住し、次男加藤中和又戸塚に趣き三男十郎左衛門義方安部撰津守家老倉光勘解由(後年寂夢と号す)の義子となり、四男六郎兵衛重昌(後に与左衛門と改む)景澄より後れて戸塚に赴きしが如く後江戸にて没す、長女は牧三左衛門(尚之の兄にして紀州家の御家人なり)の養子忠右衛門政致に嫁き、二女宇佐美兵左衛門に嫁せしかば、枝直は末子ながらも家名を相続するに至りしなり」とあり、景澄、遠定について四男重昌もはじめ戸塚へ赴き、のち江戸に出たと言う。

かく五人の兄弟すべてが戸塚あるいは江戸へ赴いたのは、父尚之の意向を受けて「人がましき奉公人」たらんとする息子達の痛切な想いのなせるわざであつたに違いない。そのうち、三人までがまず戸塚に足掛りを求めたのは、母親の異母兄弟の母方中出氏との因縁が考えられる。すなわち、母親の兄弟には、

長女 加藤与右衛門尚之妻(枝直母) 泉流妙月大姉

長男 七栗武右衛門 選月道人信士

次男 中出与右衛門 遍生院明誉光円居士

三男 七栗三左衛門

次女 笠井重郎兵衛先妻 如空妙吟信女

四男 中出次郎兵衛 円誉了輝居士

三女 一木八右衛門妻

五男 鈴木兎亮

の五男三女がおり、その両親は、石井光太郎氏掲出の系譜を参考すると、

父 七栗伝兵衛勝信 観月道念信士

先妻 井田清太夫姉 桂月妙安信女

後妻 中出又七女 円岳了頓信女

であり、さらに「牧家系譜」を勘案すると次男以下の六子の母親は後妻中出氏ということになる。そして六子のうち次男と五男が戸塚へ移住し、また次男と四男が中出氏を称している。その四男の付箋によると、中出次郎兵衛は松坂油屋町の地主ということであるが、『松坂権輿雜集』巻六の「油屋町諸家之事」に、

一、中出惣兵衛法名宗清、上州中出より来住、本苗鈴木、二代又七法名理頓、三代次郎兵衛法名源貞、四代次郎兵

衛法名了輝、五代三郎助実名安平

<sup>(1)</sup>とある通り、母方の実家を継いで四代目となったのである。その分かれが与右衛門であろうか。次男与右衛門については右に触れた石井氏掲出の系譜に、

与右衛門

母 中出又七女

十四ニテ相州戸塚中出与右衛門養子

とあり、若くして戸塚に来て養子となったことがわかる。また、その養父初代の与右衛門については、茂木堯秀氏が紹介された戸塚の生花商鈴花園所蔵〔鈴木氏系図〕に、

真光院息誉間月与休居士

涼覚院ノ伯父君也、中出与右衛門初代、勢州出生之人、元禄十三辰十二月廿一日

遍照院明譽光円居士

涼覚院ノ兄君也、中出与右衛門二代目、矢沢別家初代、勢州人、享保十二戊三月十五日

<sup>(12)</sup>とあるので、やはり伊勢の出身であることがわかる。ちなみに涼覚院は、後述の鈴木児亮すなわち戸塚鈴木家の祖で、枝直母親の末弟である。

右の中出与右衛門二代については、墓も戸塚蔵田寺の歴代住職の葬地に並んで蓮台石が存し、それぞれ次のようにある。

初代与右衛門

(正面) 元禄十三<sup>庚辰</sup>歳十二月廿一日

真光院息譽与休居士

照月院心譽妙三大姉

元禄八<sup>乙亥</sup>歳六月十五日

(裏面) 富塚町中出氏

二代与右衛門

(正面) 遍照院明譽心月光円居士

(左側) 眨享保十五庚戌三月十三日半宝蓮、因名中出与右衛門貞則、行歳七旬

(右側) 昭和二十七年九月／中出駒吉再建

とあり、枝直叔父の二代与右衛門は諱貞則で、享年七十歳という事実から、彼が十四歳で戸塚へ来た年は延宝二年とということになる。加えて初代与右衛門の石塔の右側には、他の法名と共に、貞則の両親である観月道念居士（七栗伝



兵衛勝信」と円岳了頓大師（中出又七女）夫婦の名が刻まれているので、いっかな彼らが同族であることに疑いはない。また石井氏によれば、与右衛門初代の与休は、蔵田寺の中興開基と伝えられるよしである。よって思うに、まず近世初期、中出又七の縁者と与休が戸塚に移り住み、蔵田寺を再興すると共に、戸塚中出氏の基礎を作り、のち二代与右衛門貞則をはじめとして、縁戚が中出氏を頼んで続々と戸塚に移り住み、さらには戸塚を足場として江戸に活躍の場を求めたのであろう。かくのごとくして中出氏はいよいよ栄え、一族に鳥酔門の俳人鶏父が出、その弟に春鴻、子に澧水が出たことなど、石井氏の文章に詳しく、あるいは検校が出たことは茂木氏の考証に審らかである。

また、枝直母の兄弟の末弟鈴木児亮は、本系譜の付箋に「戸塚鈴木歟、当時伊勢尾源七ト云宿中之大家也」とあるように、鈴木源七なる戸塚宿の素封家にほかならない。この源七については、はやく石井氏に「鈴木源七のことども」<sup>(13)</sup>という論考が備わり、稿者も小論「蔵書家鈴木長温のこと」<sup>(14)</sup>を草したことがあり、さらにそれを承けて石井氏に「戸塚区史」の再説がある。また茂木堯秀氏にも一連の考証があり、詳しくはそれらを参照されたいが、なお略述すれば、児亮ほか枝直母の兄弟に共通の先祖は、北畠多気御所に仕えた仁木三郎長政で、のち奥田、七栗と改称して父伝兵衛勝信に至ったのである。ただし、右掲の『松坂権輿雜集』によれば、姓の鈴木は、母方中出氏の本姓で、その本貫地は上野国ということになる。児亮は、他の系譜等と照合すると、児亮<sup>コウリョウ</sup>（小助）また源七と称し、元児はその号とおぼしい。鈴木児亮と鈴木源七両家の先祖であるが、そのうち源七すなわち上伊勢屋は、二代為将、三代富長、四代長温と続き、三代富長は官板の『孝義録』巻四に奇特者として上げられ、伊勢の画僧闇中の撰、加藤千蔭の書になる墓碑が蔵田寺に現存する。また長温については、縁戚の千蔭を慕って親交を結び、また狂歌を嗜み、大田南畝や酒井抱一の来訪を受けたこと、さらに澧水の追善句集『かれ野の露』（文政五年刊）の跋文を草したことなど、すべて右掲の諸論に詳らかである。なお村田春海門の沢近嶺の『春夢独談』上巻の次の記事を最後に引いて置きたい。<sup>(15)</sup>

長溫翁は千蔭翁のしごくにて、歌にまなびに何くれとなきみやび人なり。千蔭翁のいまそかりし時は、千蔭翁とわが師の大人と、をり／＼この戸塚には行かひ給ひけり。かゝればこの両大人のかゝれしもの、歌に文にあまたもたれけり。本なども多くたくはへられて、いふかひなき学者なりけり。ひと、せおのがよもぎふをもふみわけられし事もありて、年ごろの知己なり。今はむそぢにあまりなんかし。

しかし、蔵書は散佚し、千蔭等の書簡帳『慕親帳』その他も半世紀前の戦災で存否不明となったことは、まことに言うかいたなきことではある。

## 二、加藤枝直千蔭父子遺墨

(二)の加藤枝直詠草は、折紙に認められたものを、折り目を截断して二枚とし、うち下半分の一枚の天地を逆に表装したもの。巻端の下方に「為直上」とあるが、添削などはない。また巻尾に「已上九首」とあるが、はじめの贈歌一首を含めて計十首を数える。すなわちはじめにやや長い詞書を存し、故郷松坂の姉の許より、門前に昔見馴れた野の宮という桜を詠んだ一首を贈られたのに対して応答した一首と、ついでに書き付けた近詠九首である。姉とは、従兄牧忠右衛門政行に嫁いた於ヨシで、宝暦三年二月七日の物故であるから、本詠草はそれ以前、松坂へ詠み遣わしたものであらう。

(三)の枝直書簡は、書簡の右端に、打疊りの短冊に認めた枝直の自詠一首を貼って合装したもので、貼付の自詠はすなわち書面に言う小短籍の一枚である。その題詞に「八十八歳のはるよめる」とあるので、安永八年の詠および書簡であり、宛先は、当時の牧家当主忠右衛門清由であらう。書面は、八十八の米寿を記念して詠んだ小短冊五枚を進呈した謝礼に、手織の縮木綿一反を受取ったこと、又、枝直夫婦の長寿を祝って、清由が里交の俳号で発句を贈ったこ

とへの札などである。以下に掲げる千蔭書簡二通と共に、もとの文人表装のまま伝来し、清玩の跡が窺われる。

四の加藤千蔭書簡は、年賀状であるが、文中に「老父大病ニ御座候処」云々とあるので、おそらくは枝直晩年の天明年間のものではなからうか。宛先は、以下三通とも同じ牧忠右衛門清由と推定される。

五の千蔭書簡も年賀状で、年紀は不明であるが、「加藤又左衛門千蔭」の署名および一字花押が四と近似しているので、余り距たらない時期の筆であろう。また書面に「旧臘も不相替」御用多キ相勤」云々とあるので、千蔭の町奉行与力在職中、すなわち天明七年以前の書簡であることは間違いない。

六の架蔵千蔭書簡は、千蔭が奉次郎すなわちのちの又左衛門直蔭を養子に迎えたのを祝して、牧家から縮一反を贈られたことへの礼状である。直蔭は、前述の通り、枝直の兄六郎兵衛のち与左衛門重昌の孫であり、天明八年に家督を相続したので、書簡はそれ以前のものである。署名、花押の書体が前の二通に比べ、より寛緩とした面持ちであるので、のちの書簡とおぼしい。

末尾ながら、貴重な資料の紹介を快くお許し下さった牧英三郎氏に対し、心底より御礼申し上げるものである。また、松坂市本居宣長記念館の吉田悦之氏に資料の撮影その他で御世話になったことを申し添えたい。

注

- (1) 【随筆雑話からすかこ】（昭和二年十月刊、六合館）所収。
- (2) 【三村竹清集】六（昭和五十九年八月刊、青裳堂書店）所収。
- (3) 【伊勢国司とその時代】（昭和五十七年八月刊）一四七頁。原史料は内閣文庫所蔵。
- (4) 写一冊。奥に「牧忠右衛門（花押）／寛政八辰二月」とある。

- (5) 『校松坂権輿雜集』(大正八年二月刊、三重県史談会) 卷二、二二丁表。
- (6) 右同、二二丁裏。
- (7) 右同、二三丁表。
- (8) 『<sup>隨筆</sup>雑話からすかこ』二〇八、九頁。
- (9) 『校註国歌大系』第十五卷(昭和三年八月刊、国民図書株式会社) 三四七頁。
- (10) 『戸塚区史』(平成三年三月、戸塚区史刊行委員会) 一一六、七頁。
- (11) 『校松坂権輿雜集』卷六、一一丁表。
- (12) 『八坂神社祭歌碑長歌(承前4)——祭歌碑建立の人々(2)——』(郷土戸塚歴史の会会報『とみづか』一二、昭和六十一年五月) 一三頁。
- (13) 『鈴木源七のことども(上・下)』(『書物展望』一三ノ九・一二、昭和十八年)。
- (14) 『藏書家鈴木長温のこと』(『日本古書通信』六九三、昭和六十二年四月)。
- (15) 『続日本隨筆大成』八(昭和五十五年八月、吉川弘文館) 一六六頁。